

学生街を歩く

④

◆九州大学と箱崎
(福岡市)

読売新聞記者 中西 茂

九州大学はいま、福岡市西区と糸島市にまたがる伊都キヤンパスへの壮大な移転事業の真っ最中である。一、二年生が教養課程を学んでいた六本松(福岡市中央区)は昨年三月で移転が完了、大学本部のある箱崎(福岡市東区)からも二〇〇七年三月、工学部が移転を終えた。箱崎ではまだ六千人前後の学生が学んでいるが、学部生だけで三千人を超えて最も学生数が多く、かつ歴史も古い工学部の移転から三年余りがたち、周囲の学生街には寂しげな空気が漂い始めている。

そんな移転計画が動く中、文学部社会学研究室の学生有志が二〇〇七年に作ったのが箱崎九大記憶保存会だ。箱崎や六本松の歴史ある店を訪ね、関係者の記憶や証言、そして周囲の風景を記録する活動である。

代表を務めた益田仁さん(現長崎国際大学助教)(二八)によると、きっかけは、箱崎地区にある定食屋「ふなこし」との出会いだった。益田さんは大学院生時代、毎日のように「ふなこし」に通った。「研究に行き詰ったとき、友人

関係で悩んだとき、失恋したとき、慰め励ましてくれたのがこの店のおばちゃん、おじちゃんでした」。そのおばちゃんから、「移転するのは寂しかねえ」と言われ、箱崎の街と大学との関係を考えるようになったのだという。

今回の取材では、益田さんの後輩で、保存会の活動を引き継いでいる大矢敦子さん(九大職員)や石橋香織さん、関谷悦子さん(ともに文学部四年)にじっくり話を聞くことができた。狭い路地の一角にある「ふなこし」も訪ねた。彼女たちが回った店は、五〇軒を有に超える。「閉店の告知は出したくない。常連さんに声をかけられたらせつない」と、ひっそり

店を閉めた経営者の思いにも耳を傾けた。「大盛りご飯が当たり前」という店をいくつも訪ね、「毎日、焼き鳥にビール」というような生活を送った。その結果、益田さんが経験したような、学生と



記憶保存会ができるきっかけになった定食屋「ふなこし」前で石橋さん(左)と、関谷さん。



歴史を感じさせる「海門」の大広間

たちへの感謝の言葉を口にする。「海門」ではいまも九大生がアルバイトで働く。長崎出身で、家族を原爆で亡くした崎田さんは、最近のバイト学生に「近現代史をもっと勉強しろ」とはっぱをかけたたりもする。正門近くでは、すでに閉店した喫茶店「プラント」の店構えだけが残っている。

街の濃い関係について再認識しようだ。旧制高校時代からの学生寮の伝統行事についても楽しそうに語る様子を聞いていて、九大の女子学生のたくましさも感じた。

箱崎キャンパス周辺の店を筆者も訪ねてみたが、返ってくるのは「九大の学生さん、さままま」といった声ばかりだった。食堂「はこぎき」では三〇年近く前の写真を玄関に飾っている。前身の小料理屋時代、ラグビー部に所属する学生が訪ねてきてくれたのをきっかけに、運動部系の学生が常連になった。そのころの写真だと店主の谷所潔さん（八〇）夫婦が懐かしむ。今年が開店から三九年目という居酒屋「海門」の経営者、崎田正さん（八五）もまず学生

た。閉店は、数年前の地震による店の被害が引き金になった。「プラント」とはフランス語で春。青春時代を象徴することから学生街にふさわしい名前のような。筆者の母校の目の前にも「ぶらんたん」という店があって、行ききりだった。「プラント」の開店は一九六〇年。前九大総長の梶山千里さん（日本学生支援機構理事長）も通った。恩師が第二の研究室のように使っていて、いつも呼び出していたので、いまでも電話番号を思い出せるという。

新キャンパスの地名「伊都」は、魏志倭人伝にも登場する「伊都国」の伊都だ。丘陵地のキャンパスにも古墳がたくさんある。真新しいキャンパスの工学部前バス停の真前に、木造の小さな居酒屋がある。赤ちようちんがシンボルの「あかでみっくらんたん」

（らんたんは「ちようちん」の意）。「九州大吟醸」や「Qビー」も作った地元の浜地酒造が outlet している。梶山さんのアイディアだそうだ。「あかでみっくらんたん」では、糸島市の農家が地元食材を使った弁当を販売するなど、学生との交流が少しずつ始まっている。



赤ちようちんがシンボルの「あかでみっくらんたん」